慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ナムイ語冕寧方言の音韻体系
Sub Title	A phology of Dzolo dialect of Namuyi
Author	西田, 文信(Nishida, Fuminobu)
Publisher	慶應義塾中国文学会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾中国文学会報 (Bulletin of The Keio Sinological Society). No.3 (2019.) ,p.103 (20)- 122 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	奥野信太郎先生没後五十年記念特集号
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12810295-20190329-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ナムイ語冕寧方言の音韻体系

西　田　文　信

1．話者・分布地域・系統関係

ナムイ語[1]は、中華人民共和国四川省涼山彝族自治州の冕寧県・木里藏族自治県・西昌県・塩源県及び甘孜藏族自治州九龍県に分布している所謂「川西民族走廊諸語」のひとつである。ナムイ語の言語系統は、シナ＝チベット語族・チベット＝ビルマ語派・羌語支（孫 2001：160）とされるのが一般的であるが、未確定である。ナムイ語の話者人口は3,000人ほどとされで、多くは彝語と漢語を流暢に操りナムイ語の単一言語話者は非常に少ない。

ナムイ語を話すチベット族（以下、ナムイ＝チベット族と称することとする）は民国時代までは「西蕃」、1949年以降は「小西蕃」と称されたが、民族識別工作では蔑称であると改められ、現在では藏族（Tibetan）として分類されている。「西番」は主に大渡河以南から金沙江以北の地域に分布し、「納木依」「多須」「里汝」「爾蘇」「魯蘇」「本尼洛」「須迷」の７種の自称集団が存在する。歴史的な文献では、『博物志』異魯に「蜀中南高山有西蕃部落」、『宋史』巻49蛮夷４に「至黎州……入西蕃求良馬以中市」、『冕寧県志』（咸豊７年編）に「冕寧聚五方之民、西蕃、猓、獠狻……雑処其地……」等の記載が見られる。

ナムイ語を含む川西民族走廊諸語は、孫（2001：160）が羌語支の設定を確定するまではヒマラヤ語支乃至は彝語支として分類されてきた。孫の謂う羌語支は死語である西夏語を含む以下の13言語から成り立っている。

ナムイ＝チベット族には、自分たちの祖先は400年ほど前にラサから移住してきたという伝承が広く分布している。また、ナムイは当時の某有力者の10人兄弟の息子達のうちの５人兄弟の末裔であるとの伝承も流布している。当時はナムイ＝チベット族は漢族と通婚すべきではないとされたが、ある有力者が漢族と結婚したことでそれを快く思わない人々の間で戦争がはじまり、大規模な要塞に建設され多くの人が配置されたという伝承もある。現在では、ナムイ＝

川西民族走廊諸語のグルーピング

[Tangut (Xixia)	西夏]		北支
Qiang	羌		
Minyaky=minyao=Muya	木雅		
Primi=Pumi	普米		
Ergong	尔龚		
rGyalrong=Jiarong	嘉戎		
Lavrung	拉坞戎		
Ersu	尔苏	南支	
Namuyi	纳木义（纳木兹）		
Shixing	史兴		
Guiqiong	贵琼		
Choyo	却隅		
Zhaba	扎巴		

チベット族は漢族及び彝族と広く通婚している。

涼山彝族自治州のナムイ＝チベット族の中には、「ナムイ」という語が「ナム」が“黒”、「イ」が“人”から構成されていることを根拠に、自分たちの祖先が彝族と関係があると信じている者が少なくない。歴史的にはボン教を信仰していたと主張する者もいるが、現在ボン教寺院は一つも存在しない。各家族で信仰する山をもち、家族が死亡すると死者の加護を目的に山羊・羊・豚などの家畜を殺し神に捧げる。

超自然的存在の表象としてナムイ＝チベット族は、ナムイ語で ^{R}mupu と称される白石祀る習慣があるが、白石を深山から採取して持ち帰り、屋根の東端に３個または５個か７個置く。その際オンドリ・ヤク・メンヨウのいずれか生贄とし、^{H}papi と称される宗教職能者が経文を唱える。この他に、樹神及び山神が重要な宗教的存在となっている。

2. ナムイ語について

本稿では、ナムイ語冕寧方言の音韻体系について述べる。先ずナムイ語の音声を提示するが、その後は本稿を通じて音韻表記で表す。チベット・ビルマ語派という観点からすると、ナムイ語の音韻体系はやや複雑な部類に属すると言い得る。ナムイ語には多数の子音が存在するが、本論文で対象とするゾロ方言には、44の音節頭子音と25の音節頭子音結合が存在する。ナムイ語にはまた、

一連の有声有気音子音が見られる。本稿では以下、子音と母音の音素についての解説を試みる。声調に関しては稿を改めて論じたい。

2.1 母音

2.1.1 単純母音

ナムイ語には10の音素母音があり、基本的に[i] は /i/、[e] は /e/、[ɛ] は /ɛ/、[ɿ, ʅ ɯ] は /ɨ/、[y] は /ʉ/、[ə] は /ə/、[a] は /a/、[u] は /u/、[o]は/o/、[ɔ] は/ɔ/と解釈する。音韻的に母音に長短の区別は無いが、第一音節の母音は感情的色彩を付帯させる目的で延ばされることがある。例えば、^{L}atsɨtsɨ は「小さい」という意味であるが、^{L}aːtsɨtsɨ では「非常に小さい」という意味になる。^{L}aːːtsɨtsɨ とすれば「非常に非常に小さい」の意を表せる。母音音素を図2.1に示した。音声学的な音価はカギ括弧（[ ]）内に示した。

	前舌			後舌
狭	/i/	/ɨ/	/ʉ/	/u/
半狭	/e/			/o/
半広	/ɛ/	/ə/		/ɔ/
広		/a/		

図2.1：ナムイ語の母音音素

音素 /i/ は非円唇前舌狭母音 [i] で、非円唇前舌狭弛緩母音 [ɪ] までおよぶ領域の異音を持つ。多音節単語の第一音節に置かれた場合、感情表現を表す際はしばしば [iː] で現れることがある。

^{H}chi	[tɕ^{h}i˥]	‘３人称単数人称代名詞’
^{F}ikha	[i˥ k^{h}a˩]	‘茶’
^{R}bi	[bi˧˩]	‘桃’
^{L}tshi	[ts^{h}i˩]	‘犬’
-di	[di]	‘主題標識’

音素 /e/ は非円唇前舌半狭母音 [e] である。場合によっては、弱く [ẹ] と表現されることがある。

^{F}he	[he˩˧]	‘金’
^{R}ntshe	[nts^{h}e˧˥]	‘鹿’
^{L}ge	[ge˨˩]	‘淡黄色の牛’

音素 /ɛ/ は非円唇前舌半狭母音 [ɛ] である。これはときおり、慎重な発話では、特に高齢者が話す時に、二重母音 [ai] として表現されることがある。二重母音 [ai] が通時的に [ɛ] へと発達したと筆者は推定するものである。

^{H}sholɛ	[ɕo˥˩lɛ˥]	‘紹介する’
^{F}yɛkhukhumu	[jɛ˥khu˥˩khu˧˩ mu˨˩]	‘素早く’
^{R}miqɛ	[mi˨˩qɛ˥]	‘日が落ちる’
^{L}tsɛ	[tsɛ˨˩]	‘乗る’
-lɛ	[lɛ]	‘～と’

音素 /a/ は非円唇前舌広母音 [a] で、非円唇後舌母音 [ɑ] までおよぶ領域の異音をもつ。

^{H}nga	[ŋa˥]	‘１人称単数人称代名詞’
^{F}radu	[ra˥du˨˩]	‘襟’
^{R}hala	[ha˨˩la˥]	‘猫’
^{L}ani	[a˨˩ni˨˩]	‘全て’
ma-	[ma]	‘～ない（否定標識）’

音素 /ɨ/ は非円唇中舌狭母音 [i] として表現され、特に歯茎硬口蓋子音の後でこのように実現される。これは歯茎摩擦音と破擦音の後で舌尖前部母音 [ɿ] として発音され、そり舌音の後で舌尖後部母音 [ʅ] として、また、両唇音と軟口蓋子音の後で [ɯ] として実現される [(2)]。母音 [ɿ] と [ʅ] はいずれも舌尖音であり、前者は舌先を歯茎音領域に近づけて、後者は舌先を後部歯茎音領域に近づけて発音する。母音 [ʅ] は、舌体、特に後背側の部分が咽頭に向かって後ろに引っ張られるので、咽頭音化している。音素 /ɨ/ は、軟口蓋子音と両唇語頭子音の後では非円唇後舌狭母音 [ɯ] として実現される。したがって、以下のようにまとめられる：

/ɨ/ → [ɻ̩]/ [-distributed, +anterior, -high] _____
/ɨ/ → [ʐ̩]/ [+distributed, -anterior, +high] _____
/ɨ/ → [ɯ]/ [-coronal] _____

^{H}mudzɨ	[mu˥dzɻ̩˥]	‘大麦’
^{F}namuzɨ	[na˥mu˧zɻ̩˩]	‘ナムイ＝チベット族’
^{R}zɨmi	[zɻ̩˩mi˥]	‘女性’
^{L}tshɨ.....	[tshɻ̩˩]	‘洗う’
^{H}dutrɨ	[du˥tʂ^{h}ʐ̩˥]	‘翼’
^{F}srɨdrɨ	[ʂɻ̩˥ dʑɨ ˩]	‘思う’
^{F}diakhɨdrɨ	[dia˥ k^{h} ɯ ˩]	‘遠くに’
^{R}sɨta	[s ɯ ˩ta˥]	‘発見する’

音素 /ʉ/ は円唇中舌狭母音 [ʉ] として表現され、円唇前舌狭母音 [y] におよぶ領域の異音をもつ。

^{H}ʉqa	[y˥qa˥]	‘家’
^{F}ʉphio	[y˥p^{h}io˩]	‘精悍な’
^{R}ʉXo.....	[y˩χo˥].....	‘他の’
^{L}ʉ.....	[y˩]	‘眠る’
-nʉ	[ny]	‘完了形式’

音素 /ə/ は非円唇中舌中央母音 [ə] である。[+ 舌頂音] の語頭子音の後では、非円唇後舌中央狭母音 [ɤ] として発音される。

^{R}phətsɛ	[phə˩tsɛ˥]	‘切る’
^{L}gədzu̯	[gə˩dzu̯˩]	‘青’
^{L}gətsə	[gə˩tsɤ˩]	‘尊敬する’

音素 /u/ は円唇後舌狭母音 [u] である。非円唇前舌狭母音 /i/ のように、この母音は通常、閉音節では開音節におけるよりもやや弱いが、その差は大きくはない。

^{H}vu　　[vu˥]　‘熊’
^{F}fu　　[fu˦˨]　‘吹く’
^{R}ju　　[dzu˧˥]　‘来る’
^{L}tu　　[tu˩˩˧]　‘千’

音素 /o/ は円唇後舌半狭母音 [o] である。場合によっては、慎重に話す時、特に高齢者が話す時に、二重母音 [ŭo] として実現されることがある。

^{H}ɕolE　　[^{H}ɕo˥lɛ˥]　‘紹介する’
^{F}yotshɨ　　[jotshɨ]　‘山羊’
^{R}yoqho　　[jo˩q^{h}o˥]　‘友達’
^{L}G’o　　[ʁo˩˩˧]　‘針’

音素 /ɔ/ は円唇後舌半狭母音 [ɔ] である。場合によっては、慎重に話すとき、特に高齢者が話すときに、二重母音 [ɑŭ] として表現されることがある。二重母音 [ɑŭ] の原型が通時的に [ɔ] へと発達したと筆者は推定する。より円唇度の高い [ɔ̹] として実現されることもある。

^{R}lɔ　　[lɔ˧˥]　‘中毒’
^{L}χɔ　　[χɔ˩˩˧]　‘十’

ナムイ語の母音音素の弁別的素性の一覧は表2.1の如くである：

	i	E	ɛ	a	ɨ	ʉ	ə	u	o	ɔ
syllabic	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
closed	+	-	-	-	+	+	-	+	-	-
back	-	-	-	+	-	+	+	+	+	+
open	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+
round	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+
tense	+	+	-	-	-	-	-	+	+	-

表2.1　ナムイ語の母音音素の弁別的素性

2.1.2 そり舌母音

ナムイ語には２つのそり舌母音、/ər/[ə˞]と/ɛr/[ɛ˞]がある。r 音化母音をもつ語彙は、四川省南東部に分布する諸言語の中でもナムイ語に特有のものである。

r 音を有する非円唇中央中舌母音の例としては以下のものがある：

^{F}vərtshi	［vəʲts^{h}iꓢ］	‘結婚する’
^{H}kuər	［kuəˡ˥］	‘取り返す’

r 音を有する非円唇前舌半広母音としては以下のものがある：

^{H}hɛr	［hɛˡ˥］	‘買う’
^{F}bɛr	［bɛˡꓢ］	‘蛇’

2.1.3 鼻音化母音

ナムイ語には２つの鼻音化母音、/ĩ/ と /ũ/ がある。これらの音素は /h/ とのみ共起する。/hĩ/ のチベット＝ビルマ祖語の *gya- であると推定する。ナムイ語における鼻音化母音 /ĩ/ は、Matisoff（1975）で提唱した「rhinoglottophilia」という現象によるものであり、h- の後で声門音と鼻音が繋がって発音されることによるものであると筆者は考える。

PTB	ナムイ語		
*gyat	^{R}hĩ	［hĩ˩］	‘八’
*gya	^{H}hĩ	［hĩ˥］	‘千’

一方、/ũ/ はチベット＝ビルマ祖語の接頭辞 s- がついているものに見られるようだが、管見の限り以下の１例しか観察されていない。

PTB	ナムイ語		
*s-mul	^{L}hũ	［hũ˩］	‘毛皮／体毛’

ここでナムイ語とチベット＝ビルマ祖語との母音対応について少しく触れる。筆者のデータを見る限り、以下のような対応関係が確認された：

PTB	ナムイ語
*a >	i
*gla	^{F}gi ［giꓢ］ ‘母’

*za	^{F}ji	[ʑi˩˥]	‘息子’
*wa	^{L}vi	[vi˨˩˨]	‘雪’
*ra	^{L}yi	[ji˨˩˨]	‘右側’

PTB	ナムイ語		
*ya >	ə		
*hya	^{F}rə	[rəi˩˥]	‘野原’
*dzya	^{F}ndrə	[nɖə˩˥]	‘食べる’

PTB	ナムイ語		
*a >	a(3)		
*ŋa	^{H}ŋa	[ŋa˥]	‘１人称単数人称代名詞’
*ma	ma	[ma]	‘否定形式’
*ta	^{L}tha	[t^{h}a˨˩˨]	‘禁止標識’
*ka	^{F}qha	[q^{h}a˩˥]	‘疑問標識’

2.1.4 二重母音

二重母音には次の９つがある：/ai、au、ʉo、iu、ie、iɛ、ia、uə、ua/。入り渡りと出渡り両方の二重母音がある。以下にすべての二重母音を示す。

/ai, au, ʉo, iu, ie, iɛ, ia, uə, ua/

2.1.5 三重母音

三重母音は /iau/ の１つしかない。標準中国語からの借入語にのみ起きる。

^{R}phiau	[p^{h}iau˧]	‘切符’「票 <Ch.」
^{L}piau	[piau˨˩˨]	‘図表’「表 <Ch.」

2.1.6 閉音節

全ての鼻音語尾は、標準中国語からの借入語においてのみ起きる。

/ɳn、in、yn、uŋ、ən、an、aŋ、ian、uan、uaŋ/

2.2 子音

2.2.1 単純子音

ナムイ語の子音の音声、及び音韻はそれぞれ表１、表２の如くである：

	labial	dental	retroflex	palatal	velar	uvular	glottal
voiceless stop	p	t			k	q	
voiceless aspirated stop	p^h	t^h			k^h	q^h	
voiced stop	b	d			g	ɢ	
voiceless affricate		ts	tʂ	tɕ			
voiceless aspirated affricate		ts^h	$tʂ^h$	$tɕ^h$			
voiced affricate		dz	dʐ	dʑ			
voiceless fricative	f	s	ʂ	ɕ	x	χ	h
voiced fricative	v ～ ʋ	z	ʐ	ʑ	ɣ	ʁ	ɦ
nasal	m	n		ɲ	ŋ		
voiceless approximant			ɹ～r～ɽ				
voiced approximant			ɹ̥～r̥～ɽ̥				
voiced lateral		l					
voiceless lateral		l̥					
Approximant	(w)			j			

図2.1　ナムイ語子音の音声的実現

	labial	dental	retroflex	palatal	velar	uvular	glottal
voiceless stop	p	t			k	q	
voiceless aspirated stop	ph	th			kh	qh	
voiced stop	b	d			g	**G**	
voiceless affricate		ts	tr	c			
voiceless aspirated affriicte		tsh	trh	ch			
voiced affricate		dz	dr	dj			
voiceless fricative	f	s	sr	sh	x	X	h
voiced fricative	v	z	zr	j	g’	G’	H
nasal	m	n		ny	ng		
voiceless			r				
voiced			hr				
voiced lateral		l					
voiceless lateral		hl					
approximant	w			y			

図2.2　ナムイ語子音の音素一覧

そり舌音の連続があると、歯音と口蓋音の連続が起きる（Matisoff 2003: 21）。語頭子音がない場合、たとえば、［a］～［ʔa］（「胸」）のような声門閉鎖音がきわめて頻繁に現れる。しかし、母音性の頭子音と対立をなさないので、これは音素ではない。ここで留意すべきは、すべての子音は、非円唇前舌狭母音（an unrounded close front vowel）/i/ が後に続くとき口蓋音化し、また、円唇後舌狭母音（a round close back vowel）/u/ が後に続くとき円唇化を伴うということである。

以下、ナムイ語の各異音の音素及びその分布についての音声学的な説明を加える。

音素 /p/ は無気無声両唇閉鎖音［p］である。

^{F}pu	［pu˨］	‘ハリネズミ’
^{R}pami	［paꜛmi˥］	‘蛙’

音素 /ph/ は有気無声両唇閉鎖音［p^{h}］である。

^{R}mopha	［moꜛp^{h}a˥］	‘半分’
^{L}phio	［p^{h}ioꜛ］	‘良い’

音素 /b/ は無気有声両唇閉鎖音［b］である。異音は［b］と［β］である。異音［β］は、早口で話すときに、母音間で、または渡り音と母音間で起きる傾向がある。

^{H}bu	［bu˥］	‘虫’
^{F}bucər	［bu˥tɕəˡꜛ］	‘寄生虫’
^{R}bojo	［boꜛdʑo˥］	‘蟷螂’

音素 /t/ は無気無声舌尖歯閉鎖音［t］である。

^{L}tu	［tuꜛ］	‘千’
^{R}tani	［taꜛni˥］	‘今日’

音素 /th/ は有気無声舌尖歯閉鎖音［t^h］である。

^{L}tha	［tha˩］	‘塔’
^{L}thobo	［t^ho˩bo˩］	‘松’
^{R}hatha	［ha˨˩t^ha˥］	‘時間’

音素 /d/ は無気有声舌尖歯閉鎖音［d］である。舌先を歯の裏側に当てて発音する。

^{H}di	［di˥˥］	‘それから’
^{L}di	［di˩］	‘病気’
-dia	［dia］	‘～に、～のために’

音素 /d/ は無気無声舌背軟口蓋閉鎖音［k］である。

^{R}ki	［ki˧］	‘霜’
^{R}kobo	［ko˩bo˥］	‘門’
^{R}yoko	［jo˥ko˥］	‘婚約する’

音素 /kh/ は有気無声舌背軟口蓋閉鎖音［k^h］である。

^{F}ikha	［i˥ k^ha˩］	‘茶’
^{F}khiza	［k^hi˥ za˩］	‘軽い’

音素 /g/ は無気有声舌背軟口蓋閉鎖音［g］である。

^{L}go	［go˩］	‘打つ’
^{R}gohlu	［go˩l*u*˥］	‘胸’

音素 /q/ は無気無声口蓋垂閉鎖音［q］である。

^{R}qa	［qa˨˧］	‘鷹’
^{F}qɛ	［qɛ˩］	‘日が落ちる’

音素 /qh/ は有気無声口蓋垂閉鎖音［q^h］である。

^{R}qhotso　［q^ho˩tso˥˥］　‘口’
^{R}yoqho　［jo˩q^ho ˥˥］　‘友達’

音素 /G/ は有声口蓋垂閉鎖音［G］である。

^{R}Gɛ　［Gɛ˨˦］　‘掘る’
^{R}Go　［Go˩］　‘押す’

音素 /ts/ は無気無声歯茎破擦音［ts］である。

^{R}tsə　［tsə］　‘山羊’
^{L}tsolɛ　［tso˥lɛ˥］　‘紹介する’

音素 / tsh/ は有気無声歯茎破擦音［ts^h］である。

^{L}tshi　［tsh$\underset{\sim}{i}$˩］　‘塩’
^{L}tsho　［ts^ho˩］　‘男’
^{L}tshɨ　［tsh$\underset{-}{ɨ}$˩］　‘洗う’

音素 /dz/ は有気歯茎破擦音［dz］である。

^{H}dzo　［dzo˥］　‘存在する’
^{R}dza　［dza˨˦］　‘薄い’

音素 /tr/ は無気無声そり舌閉鎖音［tʂ］である。

^{R}tru　［tʂu˨˦］　‘酸っぱい’
^{L}tr...　［tʂi˩］　‘星’

音素 /trh/ は有気無声そり舌閉鎖音［$tʂ^h$］である。

^{F}trhɛ　[tʂ^{h}ɛ˨˩]　‘霊’
^{F}trhu　[tʂ^{h}u˨˩]　‘煙’

音素 /dr/ は無気有声そり舌閉鎖音 [tʂ^{h}] である。

^{L}dru　[dʐu˩]　‘腰’
^{R}dru　[dʐu˨˩˦]　‘源’

音素 /c/ は無気無声舌端口蓋破擦音 [tɕ] である。

^{F}ce　[tɕe˨˩]　‘乗馬する’
^{R}ce　[tɕe˨˩˦]　‘引く’

音素 /ch/ は有気無声舌端口蓋破擦音 [tɕ^{h}] である。

^{F}cha　[tɕ^{h} a˨˩]　‘塩’
^{F}che　[tɕ^{h} e˨˩]　‘鉛’

音素 /j/ は無気有声舌端口蓋破擦音 [dʑ] である。

^{F}ja　[dʑa˨˩]　‘正しい’
^{L}ja　[dʑa˩]　‘ご飯’

音素 /f/ は無声唇歯摩擦音 [f] である。

^{H}fu　[fu˥]　‘吹く’
^{R}fu　[fu˨˩˦]　‘孵化する’

音素 /v/ は有声唇歯摩擦音 [v] である。これは有声唇歯接近音 [ʋ] を伴なって自由に変化して起きる。

^{H}va　[va˥]　‘取る’

音素 /s/ は無声歯茎中線摩擦音［s］である。

^{H}so　［so˥］　‘三’
^{L}so　［so˩］　‘教える、習う’

音素 /z/ は有声歯中線摩擦音［z］である。

^{H}zu̧　［zy˥］　‘使う’
^{F}zu　［zu˧˥］　‘良い’

音素 /sr/ は無声そり舌中線摩擦音［ʂ］である。

^{H}sro　［ʂo˧˥］　‘言う’
^{F}sru　［ʂu˧˥］　‘鉄’

音素 /zr/ は有声そり舌中線摩擦音［ʐ］である。

^{F}zru　［ʐu˧˥］　‘草’
^{F}zrɨ　［ʐɿ˧˥］　‘肥料’

音素 /sh/ は無声歯茎口蓋中線舌端摩擦音［ɕ］である。

^{L}shi　［ɕi˩］　‘錫’
^{R}shiu　［ɕiu˨˩］　‘錆’

音素 /x/ は無声軟口蓋中線摩擦音［x］である。

^{R}xi　［xi˨˩］　‘ 湖 ’

音素 /g’/ は有声軟口蓋中線摩擦音［ɣ］である。

^{L}g’a　［ɣa˩］　‘鶴’
^{L}g’ə　［ɣə˩］　‘服’

^{L}g'amu ［χ̞a˩mu˩］ ‘助ける’

音素 /X/ は無声口蓋垂中線摩擦音［χ］である。

^{L}XoXoXoXom ［χo˩χo˩χo˩χom˥］ ‘擬態語’
Xo ［χo］ ‘複数標識’

音素 /G'/ は有声口蓋垂摩擦音［ʁ］である。

^{F}ʁoata ［ʁoa˥ ta˩］ ‘曾て’
^{L}ʁo ［ʁo˩］ ‘針’

音素 /h/ は無声声門摩擦音［h］である。

^{F}hĩ ［hĩ］ ‘雨’
^{F}hɛ ［hɛ］ ‘金’
^{R}hala ［ha˩la˥］ ‘猫’

音素 /H/ は有声声門摩擦音［ɦ］である。この音素は頻繁につぶやき音として表現される。

^{R}Hala ［ɦa˩la˥］ ‘霊’

音素 /m/ は有声両唇鼻音［m］である。

^{H}mo ［mo］ ‘墓’
^{R}mo ［mo］ ‘馬’
ma- ［ma-］ ‘否定標識’

音素 /m/ は成節子音となることがある。

^{F}mna kha ［m̩˥ na˧ kha˩］ ‘空’

音素 /n/ は有声舌尖歯鼻音［n］である。

^{H}na　［na˥］　‘～と’
^{R}na　［na˩˧］　‘豆’

音素 /ny/ は有声口蓋鼻音［ɲ］である。有声そり舌鼻音［ɳ］が自由変異伴いとして現れる。

^{R}nyu　［nyu˥］　‘（病気に）なる’
^{L}nyi　［nyi˩］　‘貸す･借りる’

音素 /ng/ は有声舌背軟口蓋鼻音［ŋ］である。

^{H}ngu　［ŋu˥］　‘銀’
^{L}nga　［ŋa˥］　‘敢えて～する’

音素 /r/ は有声そり舌弾音［ɽ］である。この音素は有声歯茎接近音［ɹ］として実現されることもあり、特に母音間で、強い摩擦を伴う有声舌尖歯茎震え音［r］として実現される。

^{F}rapo　［ra˥po˩］　‘雄鶏’

音素 /hr/ は無声そり舌弾音［ɽ̥］である。無声歯茎接近音［ɹ̥］として実現されることもある。

^{F}ahrə　［a˥ɽ̥ə˩］　‘シャーマン’
^{R}hreci　［ɽ̥etɕi˩］　‘土’

音素 /l/ は有声舌端歯茎側面接近音である。

^{F}luzi　［lu˥zi˩］　‘砂’
^{R}la　［la˩˧］　‘芥’

^{R}lulu ［luꜛꜜluꜛ］ ‘（犬が）吠える’

音素 /hl/ は無声舌端歯茎側面接近音［*l̥*］である。

^{H}hla ［l̥aꜛ］ ‘神’
^{F}tihla ［tiꜛl̥aꜜ］ ‘今月’

音素 /w/ は有声円唇両唇軟口蓋接近音［w］である。

^{H}wa ［waꜛ］ ‘間投詞’

音素 /y/ は有声口蓋中線接近音［j］である。

^{F}yotshi ［joꜛts^{h}iꜜ］ ‘羊’
^{F}yiki ［jiꜛkiꜜ］ ‘油’
^{R}yoqho ［joꜜq^{h}oꜛ］ ‘友達’
^{R}yoyo ［joꜜjoꜛ］ ‘自身’

各音素の弁別的特徴の一覧は以下の如くである：

	p	ph	b	M	t	th	d	n	ɳ	k	kh	g	ŋ	q	qh	G	ts	tsh	Dz	tʂ	tʂh	dʐ
syllabic	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
consonantal	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
sonorant	-	-	-	+	-	-	-	+	+	+	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-
voiced	-	-	+	+	-	-	+	+	+	-	-	+	+	-	-	+	-	-	+	-	-	+
aspirated	-	+	-	-	-	+	-	-	-	-	+	-	-	-	+	-	-	+	-	-	+	-
continuant	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
nasal	-	-	-	+	-	-	-	+	+	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-
strident	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+
lateral	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
distributed	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+
affricate	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+
labial	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
round	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
coronal	-	-	-	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+
anterior	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+
high	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-
back	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-
low	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

	f	v	s	z	ʂ	ʐ	ɕ	x	ɣ	χ	ʁ	h	ɦ	r	hr	l	hl	w	J
syllabic	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
consonantal	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	+	+	-	-
sonorant	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+
voiced	-	+	-	+	-	+	-	-	+	-	+	-	+	-	+	-	+	+	+
aspirated	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
continuant	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
nasal	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
strident	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-
lateral	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-
distributed	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
affricate	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
labial	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-
round	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	+	-
coronal	-	-	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	-	-
anterior	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	-	-
high	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	+	+
back	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	+	-
low	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	-	-	-	-

図2.3　各音素の弁別的特徴

2.2.2 音節頭子音結合

音節頭子音結合は25組あり、調音部位を同じくする鼻音が先行するタイプ（homorganic nasal preinitial）は、有声・無声両方の有気閉鎖音と有気破擦音に先行しうる。有声または無声の有気両唇閉鎖音は、歯摩擦またはそり舌摩擦の後続子音（spirant postinitial）とともに起こりうる。三子音の連結もいくつか起きる。ナムイ語ゾロ方言には以下の3種類の子音連結が存在する：

タイプ I:　/mph, mb, ntsh, ndz, nth, nd, ntsh, ndz, ntɕ, ntch, ŋkh, ŋg, ŋqh, ŋɢ/
タイプ II:　/ptch, phs, phʂ, bz, bʐ, mʐ/
タイプ III:　/mphs, mphʂ, mbz, mbʐ/

	ph	b	th	d	kh	g	qh	G	tsh	dz	tʂh	dʐ	tɕ	tɕh	dʑ	s	z	ʂ	ʐ
m	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+
n	-	-	+	+	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
ŋ	-	-	-	-	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
p	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-
ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	-
b	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+

子音結合表

本言語では、頭位連結子音において有声唇震え音［ʙ］を伴う歯音の同時調音が観察されることを指摘しておきたい。

^{R}mbɛ	［mbɛ˩］	‘boil（n.）, pus’
^{R}mbuli	［mbuli˩］	‘search for’
^{H}ndzu	［udzu˥］	‘sit’
^{R}ntshɛ	［nts^{h}ɛ］	‘deer’
^{R}ntshu phu		‘lungs’

注

1）言語名は、漢語では纳木义语，纳木依语，纳木兹语，南义语， 纳磨依语など、英語では Namuyi, Namyi, Namuzi, Namzi 等、民族名は［namuzi］, ［namuzi］, ［namuji］, ［namji］等の表記がある。

2）［ɿ］及び［ʅ］は IPA ではなく、Johan August Lundell により1878年に考案されたスウェーデン語方言字母（Landsmålsalfabetet）であり、Bernhard Karlgren が漢語の舌尖母音を表記するために用いた。この言語の音声実態をもっともよく表すものとして、本書ではこれらの記号を用いる。

3）この例は全て機能語であり、特殊な音変化を経たものであると考える。

参考文献

西田龍雄．1993「川西走廊言語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）．『言語学大辞典』東京：三省堂．第５巻．pp.197-198.

西田文信．2006「ナムイ語における漢語からの借用語について」『開篇』25: 334-341.

西田文信．2007「ナムイ語表記法試案」『中国研究』14: 81-91.

戴庆厦，黄布凡，傅爱兰，仁增旺姆，刘菊黄．1991.《藏缅语十五种》北京：燕山出版社.

黄布凡，仁增旺姆．1991〈纳木依语〉戴庆厦，黄布凡，傅爱兰，仁增旺姆，刘菊黄．《藏缅语十五种》北京：燕山出版社．pp.153-173.

拉瑪茲偓．1994〈納木依語支属研究〉《民族語文》1994年１期．pp.50-60.

李紹明．1986〈六江流域民族考察述评〉《中国西南民族研究学报（人文社会科学版）》1986年１期．pp.38-43.

李绍明，童恩正（主編）2008《雅砻江流域民族考察報告》北京：民族出版社.

刘光坤．1989〈藏缅语族中的羌语支试析〉《西南民族大学学报》1989年３期．pp.31-38.

刘辉强．1983〈納木依語概要〉《雅砻江下游考察报告（六江流域民族综合科学考察报告之一）》pp.218-241.

刘辉强．1996〈锣锅底纳木依语〉《语言研究》1996年第２期．pp.186-199.

刘辉强，尚云川．2006〈拯救羌语支濒危语言 —— 尔苏语，纳木依语，贵琼语，扎巴语资料记录和保存〉《西南民族大学学报》27卷12期．pp.11-12.

刘杨翎．2013〈纳木依符号的文字性质初探〉《龙岩学院学报》2013.4: 41-45.

孙宏开．1983〈川西民族走廊地区的语言〉中国西南民族研究学会编《西南民族研究》成都：四川民族出版社．1 卷．pp.429-454.

孙宏开．1983〈六江流域的民族语言及其系属分类 —— 兼述嘉陵江上游，雅鲁藏布江流域的民族语言〉《民族学报》3: 99-274.

孫宏開．2001〈論藏緬語族中的羌語支語言〉*Language and Linguistics* 2.1: 157-181.

扬福泉．2006〈纳木依与 " 纳 " 族群之关系考略〉《民族研究》3 期．pp.52-59，108.

Matisoff, James. 1975. "Rhinoglottophilia: The mysterious connection between nasality and glottality". Charles Ferguson, Larry M. Hyman, and John Ohala, (eds.), *Nasálfest: Papers from a Symposium on Nasals and Nasalization,* 265-87. Stanford, California: Stanford University Language Universals Project.

Nishida, Fuminobu. 2005. On pitch accent in the Nàmùyì language. Paper presented at the 11th Himalayan Language Symposium, Chulalongkorn University, Bangkok. 6-9, December, 2005.